

第5回蔵前ゼミ印象記

香田さん：“代打逆転ホームラン”と賛辞を贈りたくなる話だった。当初予定されていた講師の都合がつかなくなり急遽代役として派遣されたのが香田さんだった。「香田お前代わりに行ってこい」といった上司もさすがだ。このような人と一緒に仕事をしてみたいと思った学生は多かったのではなかろうか。学部の3年間は雀荘に入り浸ったそうだが、4年生になって卒業研究のために所属先の資源化学研究所 諸岡研究室に顔を出して「ヤバイ」と思ったそうだ。直接面倒を見てもらうことになった北島先生と“金属錯体の合成に関する研究”の打ち合わせをしたのだが、北島先生の言っていることがさっぱり分からなかったらしい。そこで「ヤバイ」となったわけだが、「ヤバイ」にも二種類ある。「このままではヤバイ」と「ヤバイことになった」のどちらかだが香田さんの場合は前者で、さっそく教科書として使っていたバーローの「物理化学」を取り出し徹底的に勉強しなおすことにした。もし後者だとすると待っているのは悲劇だ；その状況を克服するよりは逃げ出そうとする気持ちが強いゆえにバーローの物理化学を読む気にはならない。DNAの二重らせん構造を提唱してノーベル賞をとったワトソンとクリックも「このままではヤバイ」の人だった。遺伝をつかさどるDNAの構造を決めたいという野心を抱き、当時DNAの化学分析の第一人者だったシャルガフを訪ねる。自分たちの夢を語ったあとDNAの構成成分（糖、塩基、リン酸）の話になったが、名前は知っているが塩基の化学構造が分からない。ここで彼らは「（このままでは）ヤバイ」と思った。その証拠に帰りしなに本屋に寄って塩基の構造を調べるとともに関連の本を買って塩基の化学的特徴を徹底的に調べた。それが塩基間の水素結合(AT & GC)というアイディアに結びつくのである。このときシャルガフさんは油断したのではないかと思う『塩基の構造も知らない若造がDNAの構造を決めるなど何を寝ぼけたことを言っているのか』と。余談が長くなったがもう1つ。私も似たような経験をした。ポスドクとして米国で脳を材料に血圧調節因子の研究をすることになったが、化学科卒ゆえ、それまで脳には触ったこともなかった。共同研究先へ材料を貰いにいくのだが説明が皆目分からない。その日のうちに大学の本屋に行って医学部の学生が使う脳の教科書を買ってきて読み始めた。今でも思い出深い一冊となっている。

修士課程を終えて、味の素に入社した香田さんは数年間 研究所勤務をしたのち、生産現場の指揮をとることになったそうだ。香田さん自身は工場勤務を望んでいたのも地方赴任は問題がなかったが、ピアノの先生をしていた奥さんにとっては一大事だったらしい；確かに60人近い生徒さんと別れるのはつらかったに違いない。並みの夫ならば単身赴任話が持ち上がっていたかもしれない。このくんだり終盤で出てきた「しっかりした倫理観」の注釈として“お金と異性”と書かれていたことが妙に心に残った。家族あつての仕事なのだなど。とはいえ、香田さんの話を聞きながら“Where do our noses go?”という魅惑的な映画のシーンを思い浮かべて悩んだりもした。人類永遠の課題だ。

生産現場で遭遇した多様な人生の話も心にしみた。現場で汗を流すオジさんたちのまとめ役が香田さん。オジさん達にとっては息子のような上司。確かに全人格をもって仕事をしないと現場は動かない。勤務評定の時のやり取りがおもしろかった。「係長（香田さん）、昨日は絶好の釣り日和でね。いいのがいっぱい取れましたよ」。にこやかに相槌をうちながら、『いろいろな人生があり、それなりに幸せなのだな』と感慨に浸る香

田さん。労務管理も教科書通りにはいかない。

タイの工場長としての経験談は圧巻だった。参加された方は、タイの人たちと一緒に仕事をするときのコツを学ぶことができたに違いない。香田さんが5年間かけてつかんだものを惜しげもなく分け与えてもらったわけで、ありがたい話だ。講演会に出席した学生さんたちの利益を守るためにここでは詳細を割愛するが、次年度の蔵前ゼミでも香田さんには是非講師を務めてほしいと願っているの、今回見逃した人は次回を楽しみにしてほしい。

大学での研究とすべてお金に換算される企業の研究では本質的な違いがあるので、研究で身を立てたい人は大学に残りなさい、そして企業への就職を考えている人でも学生である今は研究に集中しなさいというアドバイスだった。企業から見た魅力的な人材像を一言でまとめると“自力成長エンジン搭載型”であることだ。

(参考)香田さんが推奨した本：

(1) 就職前に読む本

「汗出せ、知恵だせ、もっと働け！」(丹羽宇一郎)

「経営者、15歳に仕事を教える」(北城恪太郎)

(2) 就職したら読む本

「7つの習慣—成功には原則があった!」(スティーブン R. コヴィー; (訳)川西 茂)

「失敗学のすすめ」(畑村 洋太郎)

(3) リーダーになる時読む本

「人を動かす」(D・カーネギー; (訳)山口 博)

「平時の指揮官 有事の指揮官—あなたは部下に見られている」(佐々 淳行)

錦織さん：持ち時間の大部分を香田さんの質疑応答にお譲りになった。司会者が「時間が超過しているので、そろそろ」と打ち切りにしようとしても、「せっかくい話をしてもらったのだから」と会場が香田さんの話の余韻に浸る時間を十分に確保されたのはさすがで、「演壇に立たずとも最高の閉会の辞を述べることができる」ことを知った。しかも用意した原稿が手元にあるのに、それをボツにするのはなかなかできることではない。

10分少々の閉会の辞では、(1) 東工大のブランド力を意識し磨いてほしいこと、(2) いい仕事をするには課長よりも部長、部長よりも上級役員の方がより力を発揮できるので、出世は好きではないという人も、いい仕事をするために上位職を目指してほしいこと、(3) そして最後は大学への要望として、技術の最先端が感覚的につかめていないと企業の役員として大きな決断ができない時代になりつつある(文系出身者には役員は務まりにくい); まさしく東工大の出番とあっていい; それには会計学の基礎知識も必要なので、是非コンピュータリテラシーのようにカリキュラムに組み込んで欲しい; そうすれば他大学との差別化ができ東工大がより優位に立てると強調された。錦織さんも旭硝子時代にタイの工場長をされたが、郷に入れば郷に従えで「タイ語で役員会をしよう」と提案されたそう。心意気に打たれた。

(研究科長任期満了の私にとっては花道を飾っていただいた気がします。生命理工学研究科長 広瀬茂久)